

---

# 有限時間

葵月

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】  
有限時間

【Nコード】  
N5334L

【作者名】  
葵月

【あらすじ】  
誰も知らない、不思議な店で売られているものとは。

無理だ。

社の命運がかかる、大事な商談の日。正樹は、朝は強いというのが子供の頃からの自慢だった。勤務し続けたこの20年、一度も寝坊なんかしなかった。ましてや、1時間も寝過ぎし事なんて。

腕に目をやる。チツ：チツ：チツ：カチツ。精確無比に時が刻まれていく。9時まで、あと、5分。

「…どう考えても、30分はかかるよな。さらに渋滞ときたもんだ」そう呟くと、深くため息をつく。進んでは止まり、また少し進んでは止まる。全く、ついてない。もう諦めるしかないか…

不意に、コンビニエンス何でもストア という文字が目飛び込んで来た。

「何だあれ、新手のコンビニか。…しかし、センスないなあ」  
「そっさいながらも、ウインカーをあげ、引き寄せられるかのように駐車場へと入っていった。」

「いらっしやい」

ドアを押し開けると、小柄なお婆さんがレジに座っていた。店内を見渡すと、少しばかり電灯は暗いが、至って普通のコンビニのように見受けられる。多分、個人経営の店なのだろうと勝手に考え、缶コーヒーを一本取り、レジに持っていき、カウンターに置くと、

「あんたが欲しいのは？」

真っ直ぐこちらに視線を向けて、お婆さんが尋ねてきた。

「は…はい？何のことです？」

思わず聞き返す。

「ここは何でもストア。そんな物買いにはこんでしよう」

言葉に詰まる。フラリと入ってしまった事を少し後悔し始めていた。  
「売るよ」

お婆さんは無言で砂時計を取り出した。

「砂時計、ですか。生憎なんですけど、時間がなくてそんなものを見ている余裕がないんです」

「だから売る、と」

お婆さんが紙を一枚取り出す。

“ 時間売買契約同意書 ”

唖然としながらも紙に目を通す。要約すると、何やら時間取引で  
きるようになるという。

どうせ大したものじゃないと思いながらも、

「ここに名前を書いたら時間を買えるんですね？」

そう言つと、お婆さんはゆっくり頷き、砂時計をひっくり返し、カ  
ウンターに置いた。

店を出て車を走らせる。取り合えず遅れそうだという旨は先方に伝  
えたが、いくらなんでも30分は洒落にならないだろう。

減給は、免れないだろう…こんなことならいつそ、お婆さん  
が言ったことが本当ならいいのに。

迫りくる針を背後に感じながら、できる限り車をとばす。

会社の地下に車を止め、エレベーターに駆け込み、3のボタンを押  
す。ウィーンという音をたて昇るエレベーター！。

一息つき、時計を見る。9時3分前…なんてことだ、こんな日に限  
って時計が止まるなんて…

ドアが開くと同時に、受付に向かう。

「すみません、本日商談予定の川田正樹と申します。」

はい、どうぞ、と部屋に案内される。ネクタイを締め直しドアを開  
けて、開口一番

「遅れてしまい誠に申し訳ありませんでした！」

深く頭を下げ、恐る恐る顔を上げると、社長がポカンとした顔でこちらを見ていた。

「君」

「はいっ」

「まだ9時まで3分ある、遅刻などしていないじゃないか。遅れる可能性があるとの連絡にしろ、どうにか遅れないように走ってくる様子にしろ、君の会社は信用が出来そうだな。どれ、話をきこうか」

正樹は状況が飲み込めない中、どうにか商談を終えた。

「それじゃあ、どうするかは後で連絡するから。もっとも、期待してていいよ」にこつと笑い社長は退室した。

ホツと胸を撫で下ろす。腕にある時計は、今はまた精確に針を刻みだしていた。

「まさか本当に時間が買えるとは思わなかったよ……」

帰りに再び何でもストアを訪れた正樹はお婆さんに話し掛ける。

「で、いくら払えばいいんだい？」

尋ねるが、お婆さんは首を横に振る。

「時間はお金では買えんよ」

カウンターの砂時計は、ゆっくり、サーツという音をたて、砂を吐き出し続けている。

「ならどうすれば？無料なのかい？」

「……疑問は時間が解決することもある。どれ、今日は店じまいじゃさあ出た出た」

渋々店を出て会社に戻った。

そのまま、いつの間にか数ヶ月が経過した。

時間があるのはなんて素晴らしいことか。ここの所、仕事は

上々で残業も無く、課長に昇進することもでき、家族と過ごせる時間もすっかりとれている。それもこれも、時間が買えるおかげだ。あのお婆さんに、お礼をしにいかなきゃな…などと考えていると、  
「…ちよう！課長！！」

はつと気づく。しまった、ボーツとしすぎたか。

「もう来期の予算申請締切を1時間も過ぎてますよ。地震があつたとはいえ、業務には差し支えなかったでしょう。もう2時ですよ。早く出してくださいね」

「地震…？地震なんてあつたか？」

「らしくないですね。寝てたんですか？」

と言いながら、にこやかに笑いかけてくる。

「あ、や、すまん。今出すから」

頭をかきながら取り掛かる。

カタカタカタ。

俺には時間が味方についてる。こんなもの時計が5分進む間に終わるだろう。

「よし、でき…た？」

周りを見渡すと既に人影は無く、辺りは闇に包まれていた。

翌日。朝一番に何でもストアに向かう。あのお婆さんに一言言つてやろうといきり立ってドアを開ける。

「いらつしやい」

「婆さん、昨日は時間が買えなかった。どういうことだい？」

「昨日、昨日…ああ、そうだろうねえ。」

「そうだろうねえ、じゃないだろ。大体どうして時間が」

一瞬、お婆さんの目が見開かれたかと思うと、ボタン、という音をたて、カバンが地面に落ちた。

…カウンターに置かれた、砂時計の最後の一粒が、今ゆっくりと落下を終えた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5334/>

---

有限時間

2010年12月13日00時24分発行